

ものおもいスクラップ

神崎
悠依

雨の日のコンクリート、
車窓越しに流れる風景、
他愛ない会話。

帰りみち、

山の上からながめた街並み、
あのひとにすれ違った偶然。

昼過ぎのまどろむ時間帯、

よぎる鳥影、

蒼穹、

押し流される雲。

母の子供に生まれ、
傷つけ傷つけられ、
風に涙を乾かされ、
夕暮れに恋焦がれ、
星の輝きを夢みる。

八月六日

平和の青さに

ぞくり

身じろぎひとつした

居心地の悪いわたしは

平成生まれなのです

あ、

と 思う人がどれだけいるのだろう

教科書は祖父母は歴史は語る

半世紀前の悲惨なできごとを

なれど

遠く離れたこの地のわたしは

いったい何をおもえばいいのかわからなかった

微笑ましい

うちのお父さんも

とうとう携帯電話を買いました

それは嬉しいらしく

おほつかない手つきで

些細なことでもメールを送りたがります

このあいだ温泉にいったときも

留守番の私に

やっぱりメールがきました

もどかしくて

そちらと思える空を見上げて

ただ ただ積乱雲

でも

あの日は

キノコ雲がたちのぼっていたのだろうか？

「リフラッシュしてます」

ふと

あのレシピに挑戦してみたけれど

おなじ味は出なかった

ひじき煮

いつでも学べると思っていたんだけどな

「黒いし、ばさばさして、

なんだか食べる気になれないんだよね」

なんでやってもおなじ味が出ず

しょっぱさだけが

ただ 鼻にしみる

そう わがママをいったあのころ

きらいなものは

ひとくちだけしか食べなかつたり

時には 手をつけなかつたり

母は黙って残飯をさげた

ある日のニュース

『S県 海岸に

甘いものが苦手になって

お新香が食べられるようになった

ひとりぐらしの今

大量のマッコウクジラの死骸が漂着しました

異常気象の影響を受けたと見られます

』

上空から海岸を俯瞰する映像

折り重なるように打ち上げられている

おびただしい数のクジラ

海岸沿いの道路からの映像

こんなことはめつたにないです、と

地元民が喋る

目を瞠つたのは自分だけではないはず

気象よりも異常な光景ではないか

野次馬がみんな

手に手に 携帯電話をかかっていた

彼らがレンズを向けているそれは

死体であるのに

数十枚の遺影を思い

ブラウン管のこちらで

栗立った背筋

文明の利器よ

我らを何処へ連れゆくのだ

脱皮

シートに沈めた躰に

淀むアルコールが重い

高架橋の上を

徹夜明けの始発が

ゆっくりと動き出す

冬天は高く 未だ暗く

闇を抱き

立ちこめた雲の

墨染もなないろ

目を閉じれば

ゆうべの宴が蘇る

お喋りな友の声がまだ 胃に染みて

気づかずに摩耗した心は 漂うまま

車内に満ちる

珈琲の香りが 鼻腔を撫で

くたびれた静寂は 耳朶を打つ

心なしか 山向こうがあかるく

各駅でひらくドアが

冷えた夜気を招き

また しまる

思い立って

窓を数センチ持ち上げてみると

心地よい冷気が肌を刺す

ひとつ

またひとつ

時速七十キロで

街や夢が流れていった

太陽は未だ見えずとも

段々とした夜明け

稜線をたどり

濃淡に混じる光とりどり

紺碧 鬱金 薄萌葱までもが

明け残る星々の会話も

もう まもなく終わる

あけた車窓から

私の吐息が

しがらみが

悩む心が 流れ出た

重ね 張りつけた
うわべの皮も剥がれ落ち
さらさら ひと筋のかけらとなつて
どどん後ろへ
せわしない都会まちのほうへ
置き去りにするから
誰も拾わないでほしい

凍て空は輝き 燃え上がり
乗客は私ひとり
思考は
澄みわたり
しろくなり
何ものにも囚われなくなるとき
私は ひとたび死ぬけれども

ごおつと空気が吼えた

長いこのトンネルを抜ければ
がらんだうな躰に
光が射し込んで
新しい私に また
生まれ変わるだろう

一日 一日

この営みをくりかえすのは
ふたたび生まれたいから
この世に生まれたいから